

戸谷成雄 彫刻

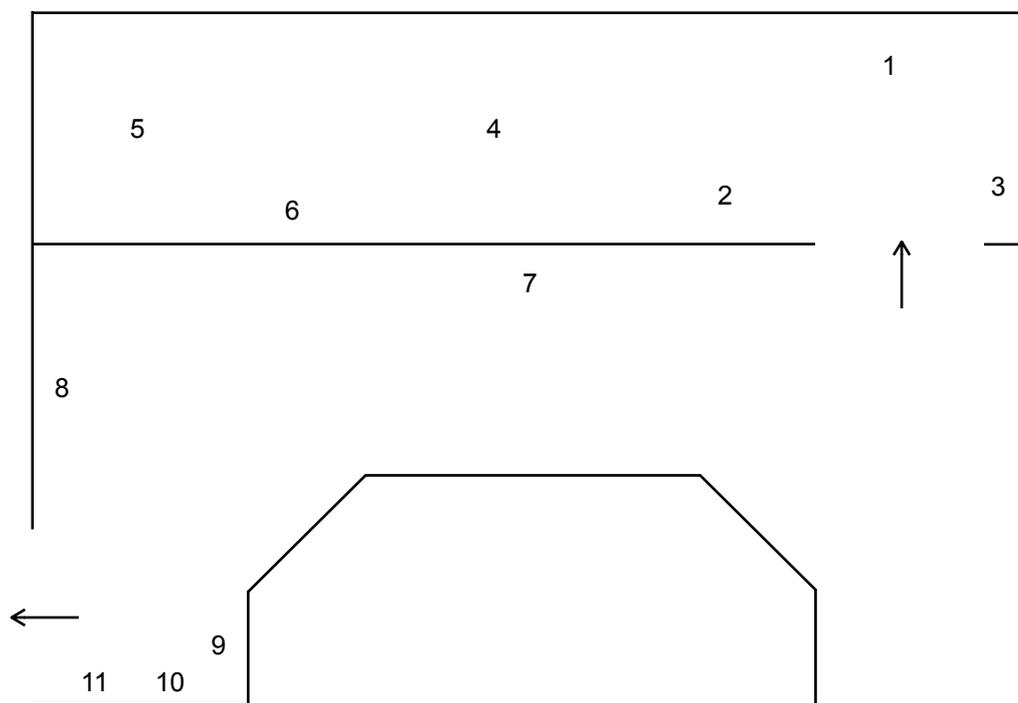
Toya Shigeo Sculpture

埼玉県立近代美術館

The Museum of Modern Art, Saitama

戸谷成雄 彫刻 作品リスト

- ・作品リストは以下の順番で記載した。ただし所蔵表記のない作品は、すべて作家蔵である。
- ・作品番号／作品名／制作年／技法・素材／所蔵先
- ・原則として作品名には〈 〉、シリーズ名には「 」を用いた。作品名に記された《 》は、すべて戸谷成雄によるものである。
- ・埼玉県立近代美術館のみで展示される作品には、作品名の末尾に*を付した。



1 男Ⅰ 斜面の男*

Man I, On a Slope
1973
木
個人蔵
Private collection

2 器Ⅲ

Container III
1973
木
愛知県立芸術大学
Aichi University of the Arts

戸谷成雄は1969年に愛知県立芸術大学に進学し、マイヨールに師事した山本豊市に西洋近代彫刻の基礎を学びました。愛知県立芸術大学の卒業制作展に出品されたこの2点は、ベトナム反戦運動や大学闘争などが活発化した当時の日本社会のなかで、戸谷が無力感を抱えながら表現を模索する過程で生み出されました。〈男Ⅰ 斜面の男〉は内部が空洞化し「鎧化」した肉体が斜面から滑り落ちるような感覚をもとに制作されました。〈器Ⅲ〉はベトナム戦争の悲惨な情報が飛び交う状況下で、何もすることができない自分自身——いわゆる「見ざる、聞かざる、言わざる」的態度を内省した自刻像です。

3 〈男Ⅰ 斜面の男〉のためのドローイング*

Drawing for 'Man I, On a Slope'
1972
鉛筆、紙

4 横たわる男*

Lying Man
1971
木

戸谷は愛知県立芸術大学の授業と並行して、名古屋大学の解剖室で死体のデッサンを行いました。本作も死体をモデルに制作された作品です。

5 POMPEII・79 Part 1

1974/1987
コンクリート、板

ときわ画廊で開催された初個展「POMPEII・79」の出品作品は、ベスビオ山の西暦79年の噴火により埋没したナポリ近郊の古代都市・ポンペイから着想を得て制作されました。火山灰のなかでポンペイ市民の肉体は気化して空洞になり、十数世紀の時を経てその穴に注ぎ込まれた石膏によって、再びかたちを回復しました。この過程は彫刻の鑄造の工程（人間が「原型」、火山灰が「鑄型」）になぞらえることができます。

ポジとネガ、内と外、実体と空間といった対概念のあ
わいへの関心は、戸谷の中心的なコンセプトとなっ
ていきました。〈POMPEII・79〉のテーマとなった
「個の領域」「関係の領域」「存在の領域」は、吉本
隆明が『共同幻想論』（1968年）の中で人間の観念
世界を「自己幻想」「対幻想」「共同幻想」と名付
けた概念に由来しています。

6 〈POMPEII・79〉のためのドローイング*

Drawing for 'POMPEII..79'

c.1974

水彩、インク、紙

7 初期作品スライドショー*

Early Works Slide Show

映像（4分36秒）

1970年、戸谷は第10回日本国際美術展（東京ビエン
ナーレ）の会場を訪れています。ポスト・ミニマリズ
ムやアルテ・ポーヴェラなど欧米の最先端の美術動向
を紹介した同展は、彼自身に大きな影響を与えまし
た。1970年代中頃には、人類の原初的な営みに立ち
返って彫刻の起源を探ろうとする「記憶のモニュメン
ト」シリーズを手がけています。これらは展示空間と
密接に結びついたサイト・スペシフィックな要素が強
く、いずれも現存していません。たとえば〈竹藪〉
は、竹林のすき間を縫うようにビニール紐を張り巡ら
せた作品です。空間を通り抜ける視線を可視化した様
子は、無数の視線の集積によって形態が生み出される
のちの作品群を予兆するかのようです。

8 レリーフ

Reliefs

1982

角材、石膏、角鉄筋

1980年から制作された「《構成》から」シリーズの作
品です。先行する「記憶のモニュメント」シリーズは
〈POMPEII・79〉に代表されるように、彫刻そのも
のを概念的な視点から捉え直す試みでした。一方、角
材などを組み上げる「《彫る》から」シリーズでは、
表面や量塊、モデリングの問題に焦点が当てられてお
り、彫刻のメチエ（技法）を捉え直す実践として位置
付けることができます。

9 閑さや岩にしみ入蟬の声（記録映像）*

How still it is here / Stinging into the stones /

The locust's trill (video documentation)

1983

映像（11分48秒）

富山県美術館

Toyama Prefectural Museum of Art & Design

撮影：山崎俊雄

初期の実践において戸谷は「彫刻とはなにか」という
問いを概念的かつ抽象的に突き詰めていきましたが、
次第にその展開に行き詰まりを感じるようになりまし
た。1983年に「《構成》から」の部材を燃やすパフ
ォーマンスを行い、新たな方向性を探るようになりま
す。この映像は、富山県立近代美術館で開催された展
覧会「現代日本美術の展望—立体造形」の際に富山県
の浜黒崎海岸で行われたパフォーマンスの記録映像で
す。角材の構成物を埋め込んだ石膏を波打ち際に立て
て、火をつけて燃やす様子が映っています。

戸谷は、同様のパフォーマンスを浜松の中田島砂丘と
バングラデシュのガンジス川岸でも行いました。この
試みは過去作品との訣別を象徴的かつパフォーマンス
タイプに物語るものであると同時に、現状を打破する新た
な着想を戸谷に与えることになりました。

10 〈閑さや岩にしみ入蟬の声〉のためのドローイング*

Drawing for 'How still it is here / Stinging into the stones /

The locust's trill'

1983

鉛筆、紙

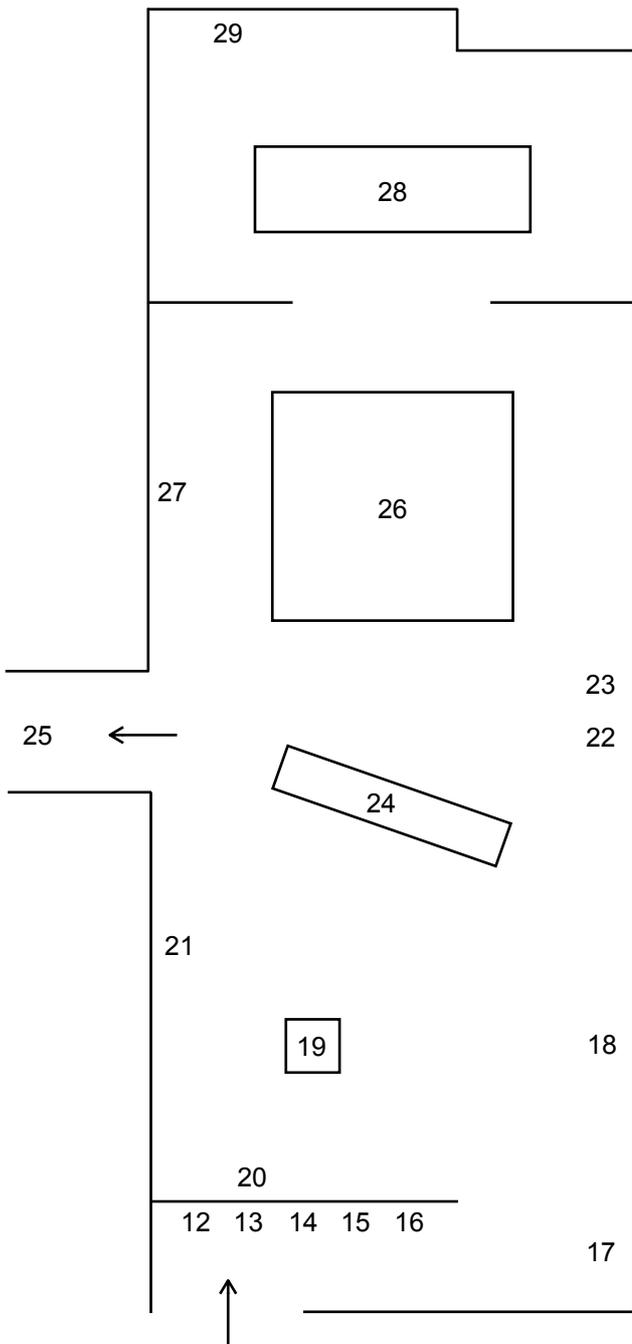
11 〈閑さや岩にしみ入蟬の声〉のためのドローイング*

Drawing for 'How still it is here / Stinging into the stones /

The locust's trill'

1983

鉛筆、紙



12 無題 1 *

Untitled 1
1984
漆喰、墨、鉛筆、布、パネル

13 無題 2 *

Untitled 2
1984
漆喰、墨、鉛筆、布、パネル

14 無題 3 *

Untitled 3
1984
漆喰、墨、鉛筆、布、パネル

15 無題 4 *

Untitled 4
1984
漆喰、墨、鉛筆、布、パネル

16 無題 5 *

Untitled 5
1984
漆喰、墨、鉛筆、布、パネル

17 地下へ II *

Going Underground II
1984
石膏、アクリル、ドローイング

18 地下の部屋 *

Underground Room
1984
石膏、プラスチック、麻、アクリル

海辺で灯された炎は構成物を物理的に消滅させると同時に、イメージの生成をうながしました。事後に描かれたドローイングには立ち昇る煙や、焼け残った石膏が地中に沈み、そこから地下深くに根を下ろす様子が描かれています。目に見えない地下の世界でうごめくこれらのイメージは、その後、石膏で制作されました。本展に出品した「地下へ II」「地下の部屋」をはじめ、変化に富む有機的なフォルムと、ピンクや緑などの鮮やかな色彩が特徴的な「地下の部屋」シリーズは、戸谷成雄の作品のなかでも異彩を放っています。

19 床から *

From the Floor
1979/1987
石膏、角鉄筋

1980年から83年にかけて制作された「《彫る》から」シリーズでは、液状の石膏のなかに角鉄筋をランダムに埋め込み、石膏が固まった後、にじみ出た鏝を頼りに鉄の位置を予測して鉋で彫り込む工程がとられています。角鉄筋は「視線」のメタファーであると同時に、石膏のなかに凹凸を生じさせてレリーフ状の形態をつくっています。本シリーズは「《構成》から」と対をなし、カービング（彫る）という彫刻の技法を観念的に捉え直す試みです。

20 象の鼻 III *

Trunk III
1982
石膏、角鉄筋

1980年代初頭までの戸谷は視覚的なイメージを前提とせず、システムを設定することで作品が成り立つような制作を展開していましたが「地下の部屋」シリーズを経て再びイメージと向き合うようになりました。

「《彫る》から」の壁面レリーフ（本展不出品）が手前にせり出して垂直に落下するようなかたちの作品を制作した際、事後的に「象の鼻」というタイトルがつけられました。「象」には「ゾウ」と「しょう（フォルム）」両方の意味が含まれています。

21 棒状のもの *

Rod-like
1982/1991
石膏、角鉄筋

22 天気輪 I

Magic Symbol I
1985
木、アクリル、紙

タイトルの「天気輪」は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のなかで主人公・ジョバンニが銀河へと旅立つ場面で登場する「天気輪の柱」に由来します。戸谷成雄は本作について「私は『天気輪』と名付けた作品を作った後、森の中にいた。木の葉の間から、光がさし込み、まぶしかった。私は、その天空と森との境にある小さな穴を「光の肛門」と名付けた。大地の肛門が「泉」と名付けられるように」（佐谷画廊編『戸谷成雄：1984-1990年の仕事』博進堂、1990年、p.54）と語っています。

23 象の鼻 *

Trunk
1984
木、鉄筋、アクリル
シュウゴアーツ
ShugoArts

24 森の象の窯の死

Death of the Kiln of the Elephant of the Woods
1989
木、灰、アクリル
東京都現代美術館
Museum of Contemporary Art Tokyo

25 森-I *

Woods-I
1984
木、アクリル、鉄筋

代表作「森」シリーズのなかで一番最初につくられた作品です。鉄筋は「《彫る》から」と同様「視線」として差しこまれています。この頃からチェーンソーを用いるようになった経緯について、戸谷は「チェーンソーで削ると、削った部分が凹み、削らなかった部分が凸として飛び出てきます。最初の〈森〉をつくったときに、このマイナスと出っ張りという関係のなかに、幅を持った表面というものが表現されるのではないかと思った」（本展図録掲載インタビュー）と振り返っています。

26 森 IX

Woods IX
2008
木、灰、アクリル
ベルナール・ビュフェ美術館
Musée Bernard Buffet

大学院卒業後の戸谷は、次第に具象的な人体表現から離れていきました。一方で「視線」や「表面」など認知のありかたが制作の起点となる戸谷の作品において、人間の身体は不可分な要素です。たとえば「森」シリーズの作品の高さ220cmは、腕を上げた戸谷自身の背丈と一致します。

「森」シリーズの背景には、作家自身の原初的な記憶が関わっています。「長野の山奥で育ったんですが、普通、遠くから山を見ると、山の輪郭があって、山のフォルムがあるんですけども、その中に入って、枯れ草の上にひっくり返って昼寝をしたりしていると、輪郭の内部に自分がいるわけですね。認識の輪郭と山の実体としての輪郭はずれているわけです。（中略）森の形状とかじゃなくて、表面にかかわる問題、自分の作品の表面を形づくるものとして、森の姿は近い感じがしたわけです」（「作家訪問 戸谷成雄 空間のかたまり」『美術手帖』1985年9月号、p.142）。

27 〈森 IX〉のためのドローイング

Drawing for 'Woods IX'

2008

鉛筆、紙

ベルナール・ビュフェ美術館

Musée Bernard Buffet

28 地霊 III-a

Spirit Regions III-a

1991

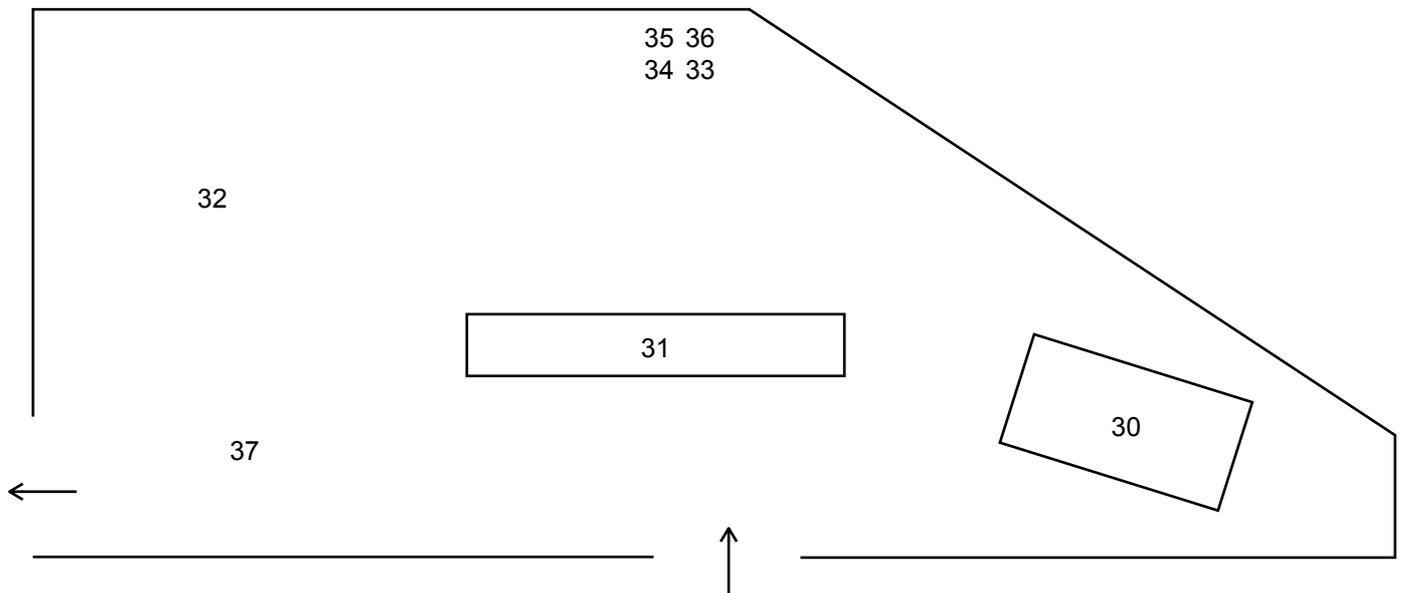
木、灰、アクリル、鉄、ガラス

29 森化 II

Metamorphosis into Woods II

2003

木、灰、アクリル



30 《境界》から III

From 'Borders' III

1995-1996

木、灰、アクリル、ガラス

「《境界》から」は1990年代半ばから後半にかけて集中的に制作されたシリーズです。阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、神戸連続児童殺傷事件などが起こり日本社会が大きな変動を迎えた時代に、戸谷は社会と人間の双方向的な関係の「境界」に「彫刻」が存在するのではないかと考えました。山津波に襲われた日本家屋のイメージで制作された本作では、先史時代の幼児の墓「甕棺墓（かめかんぼ）」が参照されています。あの世とこの世の境もまた「境界」として捉えることができるように、戸谷にとって「死」は彫刻と密接に結びついた重要な概念です。

31 双影体 II

Double Reflected Body II

2001

木、灰、アクリル

愛知県美術館

Aichi Prefectural Museum of Art

戸谷は2000年頃に「ミニマルバロック」という造語を生み出しました。造形的な要素を極限まで還元する「ミニマリズム」と、複雑で躍動感のある造形を特徴とする「バロック」という概念を同居させたこのコンセプトには、対立的な概念の相克を捉え、そこから表現を立ち上げようとする戸谷の姿勢が端的に表れています。ミニマルな直方体に複雑な襞が錯綜する本作は、中央を起点に鏡像的に造形が構築されています。

32 洞穴体 III *

Cave III
2010
木、灰、アクリル

33 〈洞穴体 III〉のためのドローイング 1 *

Drawing for 'Cave III' 1
2010
鉛筆、紙

34 〈洞穴体 III〉のためのドローイング 2 *

Drawing for 'Cave III' 2
2010
鉛筆、紙

35 〈洞穴体 III〉のためのドローイング 3 *

Drawing for 'Cave III' 3
2010
鉛筆、紙

36 〈洞穴体 III〉のためのドローイング 4 *

Drawing for 'Cave III' 4
2010
鉛筆、紙

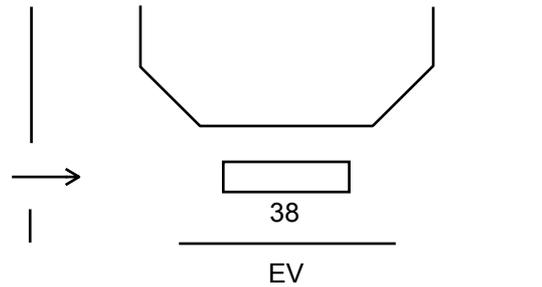
この作品のおもて面は、秩父地方の地図上に山並みや水の流れなどを意識しながら重ね描きしたドローイングをベースとして、レリーフ状に彫られたものです。裏面の有機的な塊は、地面の裏面から耳を当てて音を聴く戸谷自身の身体をモチーフに彫られています。地面に空いた大きな穴（洞穴）は、裏側の人体の耳を経て体内へとつながっています。「洞穴体」シリーズにおいて表と裏、内側と外側は絶えず入れ替わる等価な概念として存在しています。

37 視線体一連 *

Body of the Gaze—Linkage
2020
木、灰、アクリル

近年のシリーズ「視線体」は、作品を彫る際に生じる木の破片を出発点として制作されたシリーズです。「連」では、ひとつの小さな木片を拡大して彫り出したものが並べられています。作品からこぼれ落ちるように偶然生まれた木片が、面や線を基準に造形的な秩序に基づいて配置されています。それぞれのピースに「視線」として刻まれた線は、縦横無尽に空間へと広がっていきます。

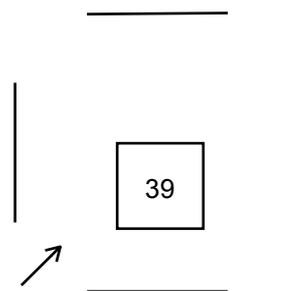
2階 エレベーター前



38 《境界》から VI *

From 'Borders' VI
1998
木、灰、アクリル

地下1階 センター・ホール



39 洞穴体 V

Cave V
2011
木、灰、アクリル

1階 MOMASコレクション（展示室A）

40 湿地帯 *

Swamp
1985
木、石膏、アクリル
埼玉県立近代美術館
The Museum of Modern Art, Saitama

※MOMASコレクション第4期（3月4日-5月7日）会期中のみご覧いただけます。鑑賞の際は企画展観覧券もしくはMOMASコレクション観覧券が必要です。

戸谷成雄 彫刻

埼玉県立近代美術館

2023年2月25日ー5月14日

主催：埼玉県立近代美術館、戸谷成雄展実行委員会

協力：シュウゴアーツ、ケンジタキギャラリー

広報協力：JR東日本大宮支社、FM NACK 5

輸送展示：スクエア4、有限会社水抜、ヤマト運輸株式会社

会場施工：株式会社東京スタジオ

巡回情報

長野県立美術館

2022年11月4日ー2023年1月29日（終了）

主催：長野県、長野県立美術館、戸谷成雄展実行委員会

共催：長野県教育委員会

協力：シュウゴアーツ、ケンジタキギャラリー

後援：長野市、長野市教育委員会、長野商工会議所、善光寺、
長野県芸術文化協会、長野県美術教育研究会、(公財)八十二文化財団、（公財）ながの観光コンベンションビューロー、JR東日本 長野支社、信濃毎日新聞社、SBC信越放送、NBS長野放送、TSBテレビ信州、abn長野朝日放送、FM長野、INC長野ケーブルテレビ